



東日本大震災から10年③



東日本大震災が発生し、まずは組合員の安否の確認を急ぎました。携帯電話の電波が繋がりにくい状況もあり、全組合員の安否確認までに多くの時間を要しました。また、ガソリンも手に入りにくい状況もあり、遠方に住む組合員宅に支援をすることも難しい状況でした。東労組仙台地本として安否確認が進まない現実から打破する為に、自転車や徒歩などで近くの組合員宅、社宅や寮に足を運び、安否の確認と同時に被災状況や支援物資の供給の有無などを確認して、支援行動に繋がってきました。社宅では倉庫を炊き出し場所にして自治会を中心にそれぞれが手を取り助け合い、少ない物資を分け合いながら助け合う姿がありました。仙台市内の寮ではライフラインがストップする中でも、工夫しながら仲間と乗り切っている姿がありました。ガソリンの確保が出来てからは沿岸地域を中心に組合員宅を地図で確認しながら一軒一軒回りました。しかし、そこには組合員の家はなく、改めて沿岸地域の津波による被害の大きさを実感しました。仙台地本として全体で1,500軒を超える組合員宅を訪問し、全国の仲間からの支援物資を届け続けました。



全国の仲間から心温まる支援を多く頂きました。当時、被災しながらも鉄道の復旧と地域の足を確保する為に奮闘する組合員の元へも支援物資を届け、労働組合の枠を超えて行動してきました。